

若人諸君へ（第四十二信）

B29

内省の力を欠くものに

本当の信念が生まれるはずはない

- | | |
|-------|----------|
| 第八信 | 太平洋戦争のこと |
| 第十三信 | 木曾御嶽 |
| 第十八信 | 鹿島槍吊尾根 |
| 第四十信 | メサイア序文 |
| 第四十一信 | リーダーの資質 |
| | 御参照 |

私は若い頃からずっと長年、夢を見てうなされ、大声をあげて飛び起きることがよくあった。

全身にびっしょりと脂汗をかいて、手のひらを固く握り締め、その手のひらも、ぬるぬるになるまで、脂汗で濡れているのである。

その夢には、二種類があった。

その第一は、岩壁を攀じ登っていて、その途中でスリップしたり、力尽きたりして、墜落する夢で、その墜落する瞬間に、大声をあげて飛び起きるのである。

最初にこの岩壁から墜落する夢を見たのは、忘れもしない昭和三十五年、神戸山岳会の夏山合宿に参加した時の、劔岳三の窓のテントの中だった。

北アルプスの南の盟主は穂高であると言われていたが、その北の盟主は、劔岳である。劔岳はその全身が、岩の鎧で覆われている。

三の窓は、その劔岳の頂上から東北へ伸びる岩稜が、東の劔沢からの三の窓雪渓と、西からの池の谷とが、双方から突き上げて出会う位置にある。劔岳本峰から伸びてくる岩稜は、ここでスッパリと切れ落ち、そこからは、眼前に、クライマー達の憧れの岩峰、チンネがその威容を誇って、堂々と、黒々と聳えている。

ここにベースキャンプを置き数日を過ごすことは、私たち山仲間にとっては、無上のものではあった。朝夕のチンネも、三の窓の雪渓も、午後になると、もくもくと雲が湧き上がってくる地獄の釜の底のような池の谷も、そこには輝くような朝日、真赤な夕日、澄み切った青空、そして黒々とした岩の殿堂だけがあって、恰も自分が爽やかな空間を独り占めしているかのような気分させられたものである。

この劔岳のことを書き始めるとキリがない。この辺りで止めて、本題を。

三の窓での夢のことである。

昭和三十五年の夏。この三の窓にテントを上げるのには、大いに苦労した。

映画「劔岳」にも出て来た劔岳西面の取付点、馬場島から白萩川を遡り、小窓尾根を越えて、池の谷へ降り立ち、そこから三の窓のゴルヘ登ったのだが、これに丸二日間を要し、しかもその初日には台風に遭遇して白萩川が増水し、そのど真中でほとんど全身白萩川の水に浸かったままで夜を明かす、などということがあって、三の窓にテントを張った時は、疲労困憊の極にあった。

着ているものも寝袋もズブ濡れで、寒さに震え上がり、ほとんど寝ることも出来なかったのだが、翌早朝、寒いからとても寝てなどいられない、動くに限る、とばかり私は相棒一人を伴って、劔岳西面を代表する岩壁、池の谷中央ルンゼに向ったのである。

池の谷中央ルンゼ。

と、言っても分らないだろうから、昭和三十一年に出版された「劔岳」の登攀ルート解説を以下に。因みにこの本の出版社は、中央区築地一六 築地書館。定価320円。

「劔岳における最大最悪のルンゼがこれであろう。」

このルンゼは右俣奥壁とドーム壁、および中央壁にはさまれ、本谷は劔尾根の頭に突きあげている。」

と、記されていて、末尾のルート解説では、

「最後にAクラスとしてあげるルート。これはアルピニストというより、むしろクライマーとして傑出した人へのみ許されるヴァリエーション・ルートである。」

と、あって、そこには、チンネ正面左方カントと並んでこの劔尾根中央ルンゼがある。私はどうしても、この中央ルンゼに登りたかった。このルンゼの基部から劔尾根の頭までは、高距七〇〇〜八〇〇メートル。登攀対象はその核心部であるF4からの上半部、約三〇〇メートルを登る。

夜の明けぬうちにテントを出発してF4に取り付いたのが、早朝七時。

F4は三段の滝になっていて、最上部には大きな岩塊 チョックストーン が嵌り込んで行く手を遮り、登るに従って暗くなっていく。

チョックストンの僅かな隙間から、洞窟のようなF4の中へ、日の光が差し込んでいて、その光を指して登る。これを突破するのに一時間以上も要したか。

やっとの思いでF4を突破した時、日暮れまでに登り切れるのか、という不安が、一瞬間をよぎったことを覚えている。

F12くらいまでは、ルートが明確らしいが、実際にはF16以上もあると言つ。さらにその上で、劔尾根ピークまで岩壁に取り付き、これを登らねばならぬ。

ピッチを上げたが、F9で行き詰った。ルートを間違えたらしく、手こずった。

ハーケンを五〜六本も打って、カラビナをかけ、アブミをかけ、吊り上げ登攀を繰り返し、漸くこれを突破した時は、もう日が暮れかかっていた。

しかも悪いことに、相棒がへばった。あるうことが、殆んどザイルにぶら下がるようにして登ってくる。その重みで、私はヘトヘトになった。

下からは池の谷特有の濃いガスが湧き起ってきて何も見えない。時折風がガスを吹き飛ばすことがあって、一瞬ルンゼが、井戸の底を覗くように切れ落ちて見える。

空中の散歩、とはよく言ったものだ。

「オイ、自分で登れよ」

「もうアカン。頼むわ」

と、もうどうしようもない。

幸いF9から上は、技術的にさほど困難なところはなく、どんどん高度を稼げたが、案じた通り、F12を越えた辺りで、夕日は右上方、劔岳頂上に姿を消した。

その劔岳本峰から北へ伸びる岩稜の端には、チンネ、ハツ峰の頭があり、そこに至るほぼ中間地点に、今登っている劔尾根が突き上げ、これらが黒々と夜空に浮び上がり、その上空は、満天の星である。月も出ていた。好天に恵まれた。何たる幸運。

もし雨だったら、滝に落ちる水と、落石の巢で、命はなかったに違いない。

私は星空を目掛けて、ひたすらに登った。

八時を過ぎた頃だったろうか。劔尾根ピークの方角から、

「オイ、フナハシー」

と、呼ぶ声が聞えてきた。

あまり遅いので心配した仲間たちが、中央ルンゼの最終地点、劔尾根ピークに集まって来てくれたのである。

「オイ、もうすぐだ！」

と、返事をして、あとは夢中で登った。

登り切った時、仲間が一斉に駆け寄ってきて、私を引きずり上げ、岩場に確保した後、私のザイルを取り上げ、後続の相棒を引っ張り上げてくれた。

登攀所要時間は十六時間。予定より五〜六時間は余分にかかった。

この時、第十八信の鹿島槍吊尾根で書いた、後に神戸山岳会会長を務めた、岸本が「オイ、吸うか？」

と、差し出してくれた煙草が「いこい」だった。

やや茶色がかった紙の包装で、二十本入り。デザインは、五線譜に四分休止符。私が煙草を、「美味しい」と、思ったこれが最初だった。

岸本はすでにこの世を去った。もう一度会いたかった。



昭和 30 年発売
「いこい」
20 本入り 40 円



昭和 27 年発売
「ピース」
オリーブの葉を銜える鳩。
- ノアの方舟の象徴 -
10 本入り 40 円

この劔尾根中央ルンゼは勿論、劔岳のことは穂高と併せて、別に書こうと思っている。

岩壁を墜落する夢を見たのは、忘れもしないこの日の夜だった。

飛び起きてみたら、手のひらも全身も、脂汗でぐっしりだった。

同じテントに寝ていたのが誰だったか思い出せないが、私の大声にはさぞ驚いたことだろう。

さて、その翌日の朝である。

私は半ば放心状態で、這い松を背に寝転んで、茫然とチンネを見上げていた。

そこへ野上博君がやってきて、そして寝ている私を覗き込んで、

「船橋さん、どこかやらないか？」

と、声をかけてきた。

野上博君は、神戸山岳会でのクライマーのエースだった野上芳宏氏の弟君で、当時、まだ関西学院の学生だった。大学山岳部に飽き足らず、兄君に従って神戸山岳会に入会してきていた。

抜群の気力と体力と、そしてその根底には明るい気質を兼ね備え、クライマーとしての技量も、胆力も衆に秀でていた。

中々、ウィットにも富んでいて、初冬の或る日、葉書で

「寒くなると嬉しくなります。八方尾根から唐松へ行きませんか。良かったら 月 日、千曲に乗ってください。食糧、装備はこちらで用意します」

と、あって、勿論「異議なし！」と、返事を出して、準急夜行列車「千曲」に、乗り込んだこともある。

その博君が声をかけて来たのである。

否やのあろう筈がない。

「よしっ！ 左方カンテへ行くか！」

と、言った途端、彼の眼鏡の奥の目が、キラリと光った。

左方カンテ。中央ルンゼを凌ぐ、チンネを代表するA級の岩壁である。

チンネそのものは高度差二五〇〜三〇〇メートルだが、がっしりとした岩壁の独立峰で、更にその基部から下方へは、三の窓雪渓に向かってほとんど垂直に切れ落ちていく。高度感は優に七〇〇〜八〇〇メートルはあるだろう。

左方カンテは、そのチンネ上半部左方に、オーバーハング気味に、ピークに向かって突き上げている岩稜である。

前述のルート解説図では、中央ルンゼの二倍以上のスペースを割いている。

今でもこれを読むほどに、手のひらに汗が滲み出てくる。

さて、博君。ギリリと目玉を光らせて、

「うん、よしっ！」

と、だけ。

ザイル、ハンマー、ハーケン、カラピナ、アプミなど、登攀用具を全身に巻きつけて、チンネの上半、下半を分ける中央バンドへ向う。ここまでは簡単に登れる。

ここから左ヘトラバース。左方カンテの真下に出る。

見上げると、空が少ししか見えない。岸壁が突き出ているのである。

心中、「ヒエーツー！」

と、眩ぐが、勿論、声には出さない。

「行くぞ！」

と、声をかけて登りはじめる。

いきなり、ハーケン、カラピナ、アプミを使つての吊り上げ登攀である。

最初のオーバーハングを乗り越えて一息つく間もなく、すぐ目の前にもオーバーハングが立ちはだかつている。

もはや、必死の挑戦、無我夢中で登っていると、下から声がかかる。

「あと、五メートル！」

残りのザイルが五メートルしかないのだ。この間に確保点 ビレイピン を探さねばならない。

今、立っているところは、ハーケンとカラピナとアプミとで、ぶら下がるような形ではあるが、辛うじて確保はできる。

然し、この上にビレイピンがあるだろうか。

上を見上げて、ちよっと考えた時、思いもかけないことが起こつた。

突如、私の中に、恐怖心がムクムクと頭をもたげてきたのである。

下は三の窓の雪渓まで、一気に切れ落ちている。

その空間には時折ガスが吹き抜ける。下方は、ずっと見えたり、ガスに隠れたりする。

恰も、空中に浮いているかのようである。

そこで私は立ちすくんだ。

生まれて始めて、岩壁の途中で味わつた恐怖心である。

この恐怖心という奴、予告なしに突然襲い掛かつて来る。

山全体が私に襲いかかり、私の精神を根こそぎ圧迫し、破壊する、という風である。

ザイルが全く伸びなくなつたのを見て、博君が、

「船橋さあん！ 変わるうか？」

と、声をかけてきた。

人の心情を汲み取ること、天分豊かな男である。

姿は見えなくても、私が立ちすくんでいるのを察したのである。

「うん、ここまで登ってきてくれ」

と、声をかけて、登ってきた彼に、私は黙ってトップを譲った。

彼も何も言わずに、そのままオーバーハングを越えて行った。

左方カンテを登り切り、チンネのピークに立った時、私は、チンネにやられた！ という思いがしていた。

充足感というものはなく、なんだか空しいような、心が静かになったような、不思議な気分だった。

博君は何も言わなかった。

その後も彼は、この左方カンテのことを決して口にしなかった。

この時以来私は、岩壁を墜落する夢にうなされ続けた。

然しこの後、不思議なことに、実際に岩を登っている時は、あの左方カンテ以外では怖いと思っただけではない。

登り始める時など、よしやるぞ！ と、意気に燃えているのである。登っている途中も、実に愉快なことから、どうしようもない。

もっとも、もし、怖いと思ったら、命を失うことになるかも知れぬのである。

この翌年昭和三十六年、私が結婚した年だが、その結婚式の一ヶ月前の初秋に井上靖の小説、「氷壁」の舞台にもなった、穂高の滝谷、C沢右俣奥壁、ドームなど、やはり困難なルートを登ったが怖いなどは思わなかった。

滝谷の取り付き点、北穂南稜テラスにテントを張り、朝夕に滝谷ドーム、第一尾根を眺め、北方には槍ヶ岳、前面には前穂高北尾根があり、実に快適で愉快であった。

それどころか、この頃、まさに病膏肓に入る、で、喫茶店の中に組み込まれた小さな落ち水の岩組みや街の家並に石組の塀などを見ると、その岩一枚一枚が岩壁に見え始め、

「左へトラバースして右へ登り、あのクラックを超えて、その上のオーバーハングを突破して、テラスに出て・・・」

などと考えている自分に気がついて、はっとすることがよくあった。

高校生時代に読んだ、確か古文の副読本に、

ある男が火鉢の中の炭火を、火箸で動かしまわる癖があって、それを気にした主人が火箸を隠したところ、その男が何やらぶつぶつ呟いているので、聞き耳を立てると、

「この火をあちらに、あの火をこちらに」

と言っているという説話があった。

これは徒然草に違いのない思い込んでいたので、早稲田大に在学中の孫に調べてもらったのだが、どうしても出てこない。無論、枕草子にもない。

教文館でも調べてもらったが、どうやら江戸時代の戯作ではないか、とのことだけで、どうもよく分からない。誰か知っている人がいたら是非教えて頂きたい。

この説話は、今思い返して見て、当時の私には全く他人事ではなく、無論、笑い話の世界ではなかった。私自身がこの通りだったのである。

然し、遂に怖いと思う瞬間がやってきた。

六甲の東、武庫川の上流に道場という村があって、そこに五〇〜六〇メートルの岩場があった。

武庫川と、それに沿って走る福知山線の列車の屋根が見下ろせるといふ岩場で、時には蒸気機関車も走っていて、春には、満開の桜並木の清流にかかる鉄橋を渡って、もくもくと煙を吐きながらやってきた。

昭和三十八年の夏だったと思う。長男が誕生して一歳になっていた。

いつものように私は、日曜日にこの道場の岩場を楽しく登っていた。

ところが突然、その途中で足がつったのである。格別、心理的に怖いと思った訳ではない。トレーニングが不足していたとも思えない。

全く予測しなかったトラブル。右足のふくらはぎが痙攣して動けなくなったのである。慌てて目の前にあつたハーケンにカラビナをかけ、セルフブレイをして、左手でそれに掴まりながら、右手で痙攣をほぐし、やっとの思いで登り切ったのだが、私はひどいショックを受けた。

左方カントでは、私ははつきりと、自身で恐怖心を味わったのだが、この時はそうではなかった。

これは恐らくは、一児の父になったことへの潜在意識がそうさせたに違いない、と、今では思っている。

こんなことが、もし本場の岩場で起こったら、それは命取りである。

自分だけではない。ザイルパートナーも捲き込むことになる。

私は神戸山岳会入会の時に私を支持してくれた、第十三信木曾御嶽、十八信鹿島槍吊尾根で紹介した大樫さんにこのことを話し、以後、本格的な岩壁登攀からは遠去かった。岩壁を離れて神戸山岳会に所属する意味がない、と思いつく。以後は会社の若者たちに山登りを教えたり、自分で好みの山を登る世界に戻って行った。

然し、夢は相変わらずで、うなされて飛び起きることは、しばしばであった。

多分、三十歳代の終り頃ではなかったろうか。

ある日の夜、私は六甲山の大月地獄谷を登っている夢を見た。

実に不思議な夢だった。

大月地獄谷は、表六甲、阪急御影から六甲の主稜へ突き上げている谷で、その川床は真白な花崗岩の清流である。

この谷の最奥には垂直に布をかけたような十メートルくらいの滝があつて、その滝を私は、なんと、下駄履きで攀じ登っているのである。

夢を見ながら潜在意識で、また落ちるのか、と思っていたような気がする。

この滝の最上部はやや大きくはみ出した形の一枚岩になっていて、ホールドが少なくヌメツとしていて嫌なのだが、私はそこを悪戦苦闘して登り切った。
なんとも気分が良くて、その滝の上流、小さなせせらぎを下駄履きのままで、鼻歌を歌って、じゃぶじゃぶと歩いているところで目が覚めた。
この夢のあと、すでに三十年以上を経過したが、まだ一度も岩壁を墜落する夢を見ていない。

何かが吹っ切れたのであろう。

こういうことは、このような夢だけの話ではないようにも思う。

何しろ墜落の悪夢というものは、こぶしを握り締め、全身は脂汗でヌルヌル、その夢のあとでは、精神的にもひどく疲れるので、体にもいいはずがない。

そのせいかどうか、私は若い頃、扁桃腺の熱をよく出した。四〇度の熱が数日続いて苦しんだ。偏頭痛、腰痛にも苦しんだ。肝臓も患ったことがある。

然し夢で大月地獄谷を登り切ってからは、徐々にこのような病から抜け出して、今は偶に、病院で血液検査をすると、全項目異常なし、とでる。

病は気から、というのは事実だと思つ。

無用の恐怖心とか、精神の停滞から生じる漠然とした不安、驕り、妬み、批判、逃避などの悪心は確かに人の身体を蝕むと思つ。

凡人の悲しさ、中々思うようには行かないのだが、せっかかない夢を見たのだから、私に残されたあと僅かな人生は、我が心の在るがままに、心豊かにすつきりと、生きていきたいものである。

そして、患う心を捨て去って、眠るようにおさらばしたい、と願っている。



劔岳本峰



仙人池より 三の窓 チンネ

では、いよいよ本題へ。

悪夢の第二。B29のことである。



B29。

これは鉛筆のことではないぞ。

誰かが

「4Bなら知ってるけど、B29は知らない。そんな柔らかい鉛筆があるのですか？」と、言ったそうだ。

今の高校生が、昔、日本はアメリカと戦争をしたことがある、と聞いて吃驚仰天、

「そんな馬鹿なことがあるはずがない！」

と、叫んだそうである。

戦後六十年以上、平和のうちに年月を経ると、「こいついつことになるのか。

B29とは。

アメリカのボーイング社が開発した戦略空軍爆撃機のことである。

「空飛ぶ要塞」とも呼ばれた。

このB29とか空飛ぶ要塞、などと言つ言葉を、昭和二十年終戦間近に、当時小学生の私知っていた、というのはどついついことか。

そう言えば、広島に原爆が落ちた時も、新型爆弾ピカドン、と言っていたのだから、如何に言論統制を布いても庶民の力を抑えこむことは出来ない、ということだろう。

私の悪夢に出てくるB29は、私がしっかりと脳裏に刻み込んでいる本物のB29の姿ではなく更に大型で、前方には照明灯をつけていて、操縦席は全面防弾ガラスで見通し良く、護衛戦闘機がそのB29の周りを囲み、機銃掃射をしながら追いかけてきて、もう逃げられぬと立ちすくむ、という、圧迫感に押し潰されそうになるところがあって、実に嫌な夢である。岩壁を落ちる夢よりも更に気分が悪い。

私はこの歳になってというか、戦後六十年以上も経って、まだこの夢を見るのである。

B29。この空飛ぶ要塞の仕様は次の通り。

全長	三〇メートル
全幅（両翼の長さ）	四三メートル
全高	八メートル
航続距離	六六〇〇キロ
最大速度	時速五八〇キロ
最大爆弾搭載量	九トン（広島原爆は一発で五トンだった）

高度は一万メートル以上を飛ぶので、高射砲弾も届かない。戦闘機もそこまでは上昇できない。

私は、B29の編隊がやって来た時、日本軍の探照灯が、十字にB29を捕捉しているのに、戦闘機がそこまで上昇出来ずただ追跡するだけで、B29は悠々と焼夷弾を落としていくのを、悔しい思いで見たくを覚えていた。

ただ、後に知ったのだが、日本の戦闘機は、最後には特攻を敢行したそうで、雲間から突然体当たりしてくる日本の戦闘機は、B29の搭乗員の恐怖の的だったそうである。このB29が日本の本土爆撃をした。

昭和十九年の暮から始まり、翌年二十年の春頃から本格化した。

私の記憶ではB29は毎晩のようにやって来たのだが、この事を確かめる機会を得た。弟の友人からB29大空襲の資料が送られてきた。その資料を見て驚いた。

私は神戸に生まれ育ったものであるが、この神戸が日本全国で最も多くB29の空襲を受けていたのである。概ね昭和二十年に入ってから八月の終戦まで、実質約六ヶ月間に神戸が空襲を受けた回数は、一二八回、東京は七〇回となっている。

神戸は背後に六甲山系、前方は海という狭い街で、ここに一二八回も空襲があれば、街が全て焼野原になるのは当然である。

海辺には、神戸製鋼、川鉄、川重、三菱重工などの阪神工業地帯があり、これが全て軍需工場だったから狙われたとのことである。私の子供の頃の記憶では、雨でなければ、毎晩B29がやって来た、夜空が快晴、満天の星、月明かりの日には必ずやって来た、というのは間違いではなかったのである。

B29の空襲は、実に抜群の音響効果とともにやって来た。

まず警戒警報のサイレンが、ウッ と長く尾を引いて鳴り響くと、隣保の当番がメガホンで、

「警戒警報発令！ 警戒警報発令！ 消灯！ 消灯！」
と、叫んで廻る。

そこで起き出して、住所、氏名、年齢、そして緊急輸血の為の血液型を記した名札を縫い込んだ、戦闘服まがいの衣服を着込み、乾パン、救急薬品などを詰め込んだ背嚢を背負い、防空頭巾を被り、息を殺して待つうちに、ウッ ウッ ウッ と、断続的にサイレンが鳴り響く。

空襲警報のサイレンである。

「空襲警報発令！ 空襲警報発令！ 退避！ 退避！」

と、メガホンが叫ぶ。

慌てて防空壕に逃げ込む。

ほっと一息ついてじっとしていると、やがて、腹の底に響いてくるような、なんとも言えぬ爆音が聞え始め、これが徐々に近づいて来る。この爆音が徐々に近づいてきて、やがて轟音になる、というのが怖い。怖いもの見たさで防空壕から首を出しそっと空を見上げると、月の光を受けて銀色に輝くB29の編隊が高高度を飛んでいる。

その編隊が幾つもいくつもやって来るのである。

この編隊が大きく旋回しながら焼夷弾を落とし、猛烈な炸裂音とともに、空が真赤に燃え上がる。

幸いなことに私たち家族は、これ以前に神戸の中心部からやや西へ、須磨に続く舞子の近くに移住して助かったのだが、昭和二十年三月十九日の神戸大空襲では、父は宿直で街中に居て、九死に一生を得ている。

このことは第八信「太平洋戦争のこと」で書いている。

私自身の体験では、艦上爆撃機にすぐ近くに爆弾を落とされ、防空壕が脆くも崩れ、辛うじて脱出したことがある。

我が家の近くに陸軍兵舎がありこれが狙われたとのことだが、真偽の程は分からない。

この時は警戒警報なしに、いきなり空襲警報のサイレンが鳴って、大慌てで防空壕に飛び込んだ直後、グワーツ という爆音と猛烈な爆弾の炸裂音があつて、地響きとともに防空壕が崩れたのである。

後になって分つたのだが、私の一級下の女の子、と言つても今はいい歳だが、花隈の料亭の娘さんの家が焼けて、その子は大火傷を負つた。

同じ艦爆にやられた、というのは、不思議な親近感を覚えるものである。

その女の子、今は立派なおバサマだが、芝原和子さんは神戸北野坂通りで、おそらく日本一のしゃぶしゃぶ屋、「しばはら」を経営している。

神戸で食事をする機会があつたら、是非行つてみて下さい。美味しいですよ。

B29を考えるのにいい材料がある。

数年前、マカロニウエスタンの名優、クリントイーストウッドが監督をした「硫黄島からの手紙」という映画が上映された。

二〇〇六年製作とあるので、この原作は、二〇〇五年初版の、栗林忠道中将のことを書いた、梯久美子の「散るぞ悲しき」だろうか。

いや然し、そんなレベルではなく、米軍にとって硫黄島は、太平洋の戦いの中でも、最悪の戦場だったので、「散るぞ悲しき」は参考程度だったのかも知れぬ。

抑々硫黄島は、小笠原諸島南、東京から一二五〇キロに位置している。

日米双方にとって太平洋戦争の最悪の激戦地とされているが、この島の面積は僅かに二二平方キロ。タテヨコ四〇五キロということで、凡そ世田谷区の半分以下の面積しかない。

ここで八万人もの日米軍人が四十日間を戦い、戦死傷者は双方合わせて四万六千人。又、太平洋戦争中、米軍の戦死傷者が日本軍のそれを上回った唯一の戦場であったことでも知られている。

この戦闘を指揮したのが栗林忠道中将で、戦地から家族に宛てて、情濃やかな手紙を書き続けたものが残されていて、それが映画の柱となっている。

戦闘の最後の局面での栗林中将の訣別電報の辞世の句が、

「・・・矢弾尽き果て散るぞ悲しき」

とあって、それが梯久美子の著書「散るぞ悲しき」の表題となっている。さて、この「硫黄島からの手紙」の映画で印象的な場面が二ヶ所あった。

その一

この島の防衛についた日本軍兵士は二万人だが、この中には少年兵が居た。

どの位の人数だったのかは分らないのだが、年齢は十六〜十七歳。今の高校生くらいである。

この少年兵たちが、米軍の侵攻に備えて毎日地下壕を掘っている。

夕方、作業を終えて帰営する姿があり、その少年兵たちが並んで歩きながら歌を歌う場面。

その歌は、原曲がスコットランド民謡の「故郷の空」。

夕空晴れて 秋風吹き

月影落ちて 鈴虫鳴く

思えば遠し 故郷の空

ああ我が父母 いかにおわす

この場面には胸を突かれた。

「散るぞ悲しき」第五章「家族」で、著者梯久美子が、栗林中将の愛娘、たこちゃんに面談する場面があり、今や年老いた、たこちゃんが、涙ぐみながらこの歌を歌いだし、「十六歳なんてあなた、まだ子供ですよ。どんなにか家に帰りたいかっただけでしょうねえ」と、目頭を押さえる。因みに私は、たこちゃんとはほぼ同年代である。

戦争末期、日本軍は兵力不足となり、徴兵年齢を、上にも下にも上げた。

下に上げたことが、この少年兵たちの悲劇を生んだのだが、上に上げたこともやはり悲劇を生んだ。

私事だが、私の父は昭和十九年に徴兵となった。赤紙である。

父は明治四十二年生まれだから、当時三十五歳。まさか徴兵になるとは考えてもみなかった筈である。私が小学生になったばかり。すぐ下の妹と、生まれたばかりの弟の、三児を残しての、戦地行きである。

然も、戦況が不利であることは誰でも知っていた。

「サイパンが玉砕だ！」

と、父が叫んでいたことを覚えている。生きては帰れぬ、と思ったに違いない。

出征の日、父は電車のドアの前に立って私たち母子に手を振っていた。その夜、母は、神棚の前に私たちを正座させ、灯明をあげ、そしてみんなて手を合わせた。

あの戦争の末期、戦地の兵士たちの多くは、このように家族を内地に残しての徴兵だったのである。それに、前途有為の学徒動員、特攻隊員。そして、年端も行かぬ少年兵たちだった。

戦争はどこまでも人の心を破壊し尽くす。そのことが悲惨なのである。

戦争のことだけではない。現代でも、人が人の心を失ったら、それは悲惨であろう。

その二、この映画のもう一つの重要な場面である。

昭和二十年二月一九日。米軍が上陸し、数日の激戦の後、硫黄島の重要拠点、擂鉢山を奪われて、尚、絶望的な戦いを戦っている最中、夜に入って、大きな爆音が遠くから聞こえ始め、やがて硫黄島の上空を大型爆撃機の大編隊が通り過ぎ、栗林中将以下がこれを見上げ、茫然とする場面である。

昭和二十年三月十日。

サイパンを飛び立った三〇〇機以上のB29大編隊。東京大空襲である。

それまで栗林中将は、何度も、

「この戦鬪が一日長引けば、その一日が我々の家族を守るのだ」

と、言い続けている。

このB29大編隊を見上げて、おそらく栗林中将は、絶望したのではなからうか。

人は何かの為に生きる、誰かの為に生きる、という目標を見失ったら、その人の人生は絶望的なものになるであろう。

ましてや何の望みもない、何の目標もない、ただ死あるのみの戦場である。

逃げ場はどこにもない。底知れぬ絶望だったのではなからうか。

少年兵たちの歌声と、硫黄島の上空を通過するB29の大編隊とが、この映画の重要な場面だと考える次第である。

余談になる。

「硫黄島からの手紙」の映画は今DVDになって発売されているが、なんと、私が強い印象を受けたこの二つの場面が、カットされている。

サイパン陥落は、昭和十九年七月。

米軍はサイパンを整備し、B29を集結し、補給を整え、日本本土を爆撃した。東京も、名古屋も、大阪も、神戸も、日本全国の空襲は全てこのサイパンからである。二十万人が犠牲となった沖繩も、サイパンから飛び立ったB29が空襲をした。広島、長崎の原爆は、サイパンに隣接するテニアンからである。

浅田次郎が推奨する小説で、中山義秀著「テニヤンの末日」がある。

絶版になっていたが、集英社が「戦争文学」全二十巻の刊行を始め、その第一回配本「アジア太平洋戦争」の中にこの小説が収められている。

サイパンとテニアンの陥落に至る経緯を軸にし、そのテニアンに、生と死のはざま、いや死以外には何も考えられぬ中で、飢え渴いた者が、水を求めるように、生を求め、死の意義を求め、それも叶わぬことと知り、望みを失っていく者の姿が書かれている。

文中の一節に、「内省の力を欠く者に、本当の信念が生まれるはずはない……」とあって、著者中山義秀の、人として生きる意義を求めようとする心を汲み取ることが出来るように思う。この一節を本信の副題としたが、実はこれが本題なのである。

浅田次郎は軍隊経験を持っているから、中山義秀が書いている戦闘、その極限状況にある人の心に係わる表現に惹かれたのかもしれない。

一読をおすすめする。

さてこのように、B29の技術革新が、米軍のサイパン攻略となったのだが、然し、そのB29の技術革新は、基本戦略に基づいて進められたもので、戦略と技術革新とは、絶えず表裏一体、相互に影響しあって進化するものだと思う。

然し私は、戦略があつてこそその技術革新である、と考えたい。

事業経営、国家経営の本質は、まず戦略があつて、それを実現するための組織、ノウハウがあるのだと考える。組織や技術やノウハウに振り回され、これに埋没してはならないのである。

もう一つ余談になるが、この原爆に関しては、後日談がある。

原爆のことである。

太平洋戦争末期、米国経済は破綻寸前であった。

原爆の開発にも膨大なコストがかかった。戦後米国は、このコストを回収し国家経済を立て直す為、原爆の技術を原爆に利用したのである。このことは原子力空母や、原子力潜水艦や、或いは、戦略的な宇宙開発とは根本から違う発想である。

原子力の平和利用、即ち人間の叡智の使い道のことである。

米国政府はこの為に、八千億円以上の災害補償は政府が行うことを約束して電力会社に原爆を開発させた。

これが今や全世界ベースに広がっているのである。

フランスは原発先進国と言われ、総発電量に対する原発の比率は、七〇パーセント。日本は三〇パーセントであるが、人口比率GDP比率から考えると、おそらくフランスと日本の原発の基数は、ほぼ同じくらいではなからうか。

原発が先進国を發展させ、脱石油の成果を挙げ、CO₂排出を辛うじてコントロールしているということになる。それでも地球温暖化は進んでいるのである。

今や日本は亜熱帯気候に変わり、近頃の異常気象のエースは、ゲリラ豪雨だと言われているが、これは、亜熱帯のスコールと同じ現象ではないか。

今、日本国内の原発は全てストップしてその穴埋めは火力発電、即ち石油、石炭が主力となっている。誰もそのことを言わないが、CO₂排出は拡大しているのである。

更に後日談。

五年ほど前のことだったと思うが、米国が開発した原発に関する技術、ノウハウ、特許その他の権利は米国ウエスティングハウス社が保有していて、これを英国核燃料会社（BNFL）が買い取り、更にそれを、なんと、この権利の全てを日本の企業、東芝が買い取ったのである。

偶々私は三菱重工の後押しをして、このウエスティングハウスの権利を買う為の動きをしたことがあるのだが、重工は東芝に負けた。買収総額は五千億円強だったと思う。

然し、原爆を落とされた日本が、その原子力を利用して発電する、世界最高の技術、ノウハウ、権利を、その原爆を落とした米国から買い取り、我が物としたのである。

この結果何が起ったか。

なんと、米国の原発プラントを、日本の東芝が輸出することになったのである。

そのプラントプロジェクトは二ヶ所。総額概ね一兆円である。

広島、長崎の原爆が、歴史を経てこういう事になるとは。

因果心報、これに過ぐるものはないであらう。

然し、更に後日談。

東北大震災。福島原発の事故の後、日本政府は周章狼狽、右往左往、右顧左眄、遂に一国の総理が、つい半年前までは、原発比率を五〇パーセントにして、更に日本の原発技術力を駆使して、原発輸出に最大限の努力をする、と言っていたのを、一転、浜岡を始め原発の全てをストップ、更に、原発の輸出も見直す、と言い出したため、米国への原発プラント輸出はストップしてしまった。

その後この話がどうなったのか知らないが、これは三菱重工がウエスティングハウスの権利を買わなくて良かった、などというレベルの問題ではない。

中国、韓国は、待つてましたとばかりに、原発プラント輸出攻勢をかけていると聞く。

更に日本では、電力不足と電力コスト上昇の為、国外へ工場などを移す企業も出始め、経済の空洞化が懸念されている。原発に対する国民感情が、世界に冠たる、日本の原発技術をみずみず放棄し、強力な輸出産業を崩壊させることになりはしないか。政府トップの真の指導力が必要なのではないか。

何事によらず、物事を一面的に見る、深く考えずに、思いつきで行動し、思いつきで発言し、思いつきで事を進める、などということは、あってはならぬことである。

まして、信念もなしに、一般大衆、大向う受けを狙って事を進める、などということは一国のリーダーがやることではない。

一国のリーダーだけではない。各企業のトップ然り。各部門のトップ然り。全てリーダーの職責にあるもの、全て然りである。

「内省の力を欠く者に、本当の信念が生まれるはずはない……」

リーダーは、誰よりも深く考え、深く自己を省み、本質を見極め、信念を確固たるものとし、而して、断行力を駆使して、困難に立ち向かわねばならない。

本題へ戻そう。

サイパン陥落後、米軍は悠々と態勢を整え、日本本土を爆撃した。硫黄島は、サイパンを飛び立ったB29の護衛戦闘機の基地となり、又、事故を起こしたB29の不時着の基地となった。



硫黄島に緊急着陸したB - 29
(1945年5月4日)

硫黄島陥落後、昭和二十年三月末以降、B29の日本本土空襲は、やりたい放題、という事になったのである。

因みに、サイパン島の面積は二二〇平方キロ。硫黄島の五倍の面積がある。B29の大量集結を可能にした。硫黄島は狭すぎたか。

話は少しそれるが、

サイパン島の戦死傷者は、米軍一万四〇〇〇人、日本軍三万一〇〇〇人、民間人も、一万人以上が犠牲となった。

サイパン島のバンザイクリフでは、今もサイパン陥落の民間人の悲劇が語り伝えられている。

サイパン島は米軍上陸から三週間で陥落したが、一方の硫黄島は凡そその倍の日数、四十日間を戦っている。

この硫黄島の戦闘は凄まじい。

僅か二二平方キロの中で、四十日間に亘って八万人もの兵士が戦い、戦死傷者はその半数以上、四万五〇〇〇人。至るところ死屍累々、絶えず砲弾が炸裂し襲いかかる、ということになる。

日本軍は誰も降伏せず最後まで戦った。生き残った兵士は僅か二百数十人。

生存率は、一パーセント。現代の我々には想像もつかない精神力、そして統率力だが、これ以上の悲惨な戦闘はないのではなかるうか。

然し、サイパン、硫黄島の悲劇は日本軍だけのものではなかった。

米軍の若者たちがあまりにも多く犠牲となった。

この為米国では厭戦気分が高まり、「これ以上若者を殺すな」という声が大きき勢いとなって沸き起こった。

米国の経済も、これ以上の戦争継続は不可能となりつつあった。

米軍がこの狭い硫黄島を陥すのに、二万人以上の兵士が死傷したことから考えれば、もしも日本が、本土決戦を辞さない、ということになれば、一体どれ程の予算を要し、どれ程の兵士を犠牲にしなければならぬのか、見当もつかない、ぞっとしている、というのが本音だった。

硫黄島の日本軍の絶望的な戦いは無駄ではなかったのである。

硫黄島のことだけではない。たいしたことではないだろう、と見てびびっていた日本が、一時は太平洋を席捲し、その後戦局不利となっても戦い続け、これが、三年九ヶ月にも及んだのである。

戦後米国が、日本の軍備を放棄させねばならぬ、と考えたのは当然である。

憲法第九条の戦争放棄の条文は、日本が考えたのではない。米国が考え、これを制定したのである。

然しこの硫黄島の戦闘では、米国にとって奇跡的な幸運があった。

硫黄島の擂鉢山に星条旗を立てようとしている兵士たちを、カメラマンが撮影し、これが偶然にも抜群のシャッターチャンスとなり、ピューリッツア賞に輝いたのである。



背景の空、翻る星条旗、そして躍動的な兵士、なんとも見事な写真である。

これが米国の厭戦気分を一気に吹き飛ばした。

米国はこの写真を大いに活用した。硫黄島の生き残りの兵士を動員して国威を高揚し、国債を発行して、漸く戦費が調達出来たとのことである。

この間の事情は、「硫黄島からの手紙」の米国版「父親たちの星条旗」に詳しい。

それにしてもB29の巨大さは前述の通りで、この空飛ぶ要塞を三〇〇機以上の編隊にし、二〇〇〇キロ以上の距離を、片道五時間以上を要して飛び、爆弾を五トン以上も積み込み、その爆弾を落として、また、五時間以上をかけてサイパンまで戻るとは、それを連日の如くやる、というのだから、敵ながらよくやるなあ、と畏れ入る。

さて、このようにして私は、小学校低学年で連日連夜B29の編隊を見ることになり、サイレンの音に反射的に防空壕に飛び込み、身をすくめることになったのである。

ただ不思議なのは、あのB29の編隊は怖いというよりもむしろ実に綺麗だと思った、という記憶がある。

編隊が見事に生まれ、一機一機がそれぞれに長い飛行雲を引きながら飛んでいくその姿は、整然と迫力に満ちていた。

然し、高高度の時は銀色に輝いていたが、旋回しながら爆弾を落としていく時には、その機影は黒々としていた。

これはやはり怖かった。

サイレンの音とともに、脳裏に焼きついてしまっていて、これが抜けずに形を変えたB29に襲われる夢となるのであろう。

ここ暫くはB29の夢を見ていないので、ひょっとすると知らぬ間に脳裏から抜け落ちたのかも知れない。然し、高齢化のせいで脳細胞が減少したのだとは思いたくない。

B29に関しては、大月地獄谷の滝を下駄履きで攀じ登って、その上の清流をじゃぶじゃぶと愉快に歩き廻るような夢はまだ見ていない。

直接的にB29ではなくても、何か絶対的な存在が、私自身の精神のありようを根底から、全てのことから開放してくれる、そんな夢を見ることが出来るのだろうか。

それが、私の最後の課題のような気がしている。

叶わぬ夢は多い。然し、叶う夢もある。

神は私に、どんな夢を見せてくださるのだろうか。

平成二十三年十月八日

松橋 走



長谷川湊二郎「猫」

洲之内徹コレクション

仙台美術館蔵

付記

劔岳岩壁登攀のことを書いたが、実はこれは、今から五十年以上も前のことである。今は、私はごく普通の登山道を、息も絶え絶えに登っている。

私が神戸山岳会から身を引こうとした時、入会の時に私を支持してくれた大樫さんが「船橋、山を止めるなよ」

と、しっかりと手を握り締めてくれた。

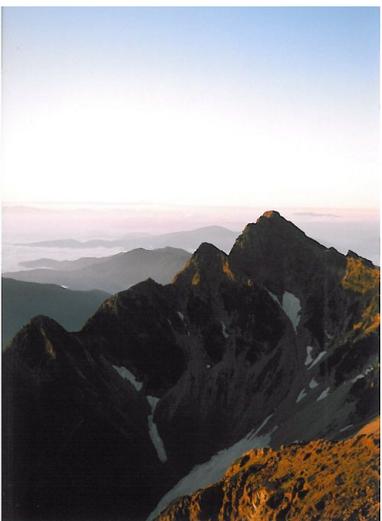
厳格だった会長の前田さんが、思いもかけない笑顔で

「ヒマラヤだけが山ではないぞ。自分に適った山を、いつまでも忘れずに歩けよ」と、言ってくれたことをしみじみと思い出す。

今年の夏の終りに、北穂高を登って、滝谷、槍ヶ岳、前穂北尾根を懐かしく見て来た。これからもマイペースで、ゆったりと山を楽しみたいと思っている。

✕

前穂高北尾根の夜明け



朝日に浮かぶ槍ヶ岳

